勢屋の若旦那から頂戴致しましたと言れ再度二階へ昇り新さん常蔵に御馳走に成うと言たらいつか勘定をして呉たさうだ何れ近日御返禮を仕ませう　鶴何う致しまして還度は吾儕が御馳走を致しませう　鶴鶴さんには充分御馳走になられ（じゃアならぬ、鶴何ンな御馳走でも致し升から何分宜敷く願ひ升　鶴こりゃア廉く無へねと笑ひながら三人連立て佃屋を出左様ならとの聲を殘して右と左り（別れしが象吉は直其足で長谷川町の新道なる伊勢屋新兵衛許訪ひ寄りしに折能く新兵衛は在宿なればこの先此方へとて象吉を座敷へ通し茶烟草盆を運ばせ纏て新兵衛が出て時候の應答終り　新「島渡俺から伺ふ筈の處を態〳〵身來で痛み入り升然して鶴吉の方はいまだに返事はありませんか實は先刻大名小路へ出た所が小柴さんが脇へ呼ンで頼母殿が鶴吉の一件は何う成たか親兵衛でも象吉でも參ッたら成否共に的速分る樣に掛合へ若し二人りの手際に行ン樣なら此方に手段があると被仰るが足下達の手で出來ずに外から出來ては異な者ゆゑ世話敷も有うけれど速う埒の明樣にとの氣附彼方の事は偏に和郎へ御頼みを致し升　鶴「支度金が入るなら出して遣る親父や姉は生涯困らせまいと實に結搆な玉の輿を假令何程の僥倖でも人の慰み物になる氣は無い今日にさへ困らずば一家女房と云れ度とは見上げた心躰俺は其志しに感じて妾に遣る世話をする事は止て嫁に遣る世話を仕樣と思ッて居ます　新「象さん這度の御乗出し御用に就ては何ンでも二人りで利を得樣と内々御相談をして是迄に運んで來たものを鶴吉の一條で虻蜂取ずにするは如何にも殘念じゃ夫は何う仕被成る考へじゃ　鶴「別に何うといふ考へも無へが女の前尻の世話をして無理に利を得樣とも思はねへ精々骨を折て夫で御用が出來ザア天命だと諦める迄の事サ　新「象さん和郎は夫で諦むるかもしらんが度〳〵の權門で遣ッた金も勘なから非此理合せをせねばなりません　鶴だから其理合せは啓庵染た眞似を仕ねへでも出來る工夫は幾許もありやす新兵衛さん些折入ッてお前さんに御相談があるが何ンと聞ちゃア下さらんか　新「更まつて聞の聞ぬのと然して其事柄は　鶴「外でもねへ鶴吉の事だがお前さんも彼を嫁に遣る世話人の一部へ遣入ちゃア下さらんか　新「淺尾樣で無くかね　鶴「勿論一軒の女房にといふ事サ一躰お前さんは彼女の心掛を感心だと思ひ被成るか　新「慾をさらん者は箆棒といふ方かもしれんが藝人としては感心と申て宜かね　鶴「實に感心な者だ新兵衛さん迚の事に鶴吉をお前さん貰ひ被成ッちゃア何うだ　新「常蔵を言ちゃア不可ン俺とは孫と言ッても宜程年も違ひモウ茶飲友達抔は貰はん積でござい升　鶴「お前さんに貰へと言ふのじゃア無へ息子さんの新三郎さんの嫁に貰ッて遣ン被成へといふ事サ　新「なる程能く分りましたがマア止めに仕ませう　鶴「何故だね　新「此間幸手在の豪農から五百兩の持參で嫁を貰へといふ口がありましたので正直此所へ五百兩といふ金が這入れば至極都合でござい升から何分御頼ン申すと頼ンで置て枠に咄しました所が彼馬鹿野郎めが持參金嫁無けなしの鼻に掛抔といふ川柳もありまして持參嫁抔は眞平御免を蒙り升と自分で口入人へ平タたく斷りましたので口入の人へ氣の毒な思ひを仕ました生憎其口入をした人は問屋の支配人で其問屋には五百兩近い借もあり升ので金の出る嫁を斷り藝人を嫁に貰ッたと申ましては問屋の氣受も宜敷くござるまいで御信切は忝けないが鶴吉を嫁に貰ふ事は御斷りを致しませう併し象さん鶴吉も名だゝる藝人若シ五百兩の持參金が出來ますなら御相談を致しても宜しうございい升　新「名高い藝人にもせよ四百の五百のといふ持參金の出來樣筈は無へ此樣な事を言たら惡いかも知れねへが鶴吉が淺尾樣の仰せに從はねへのも實は疾から此方の息子さんと懇ろの中に成ッて末は夫婦といふ約束が出來て居るので人の妾にはならねへと刎ね附たので強てお前さんが此縁談を不承知と言被成ると唯ッた壹人りの息子さんが不了簡を出し被成ッて跡で後悔を仕被成る事があるめへものでも無へから能く勘辨をして見被成へ　新「何ンと言成被る夫じゃア枠と鶴吉と疾から懇ろにして居ケましたとか道理で枠の廻る屋敷の中で不審な點殘りがある樣に存じて居ッたが其樣な引け途があるのでございませう淺尾樣の一條も枠が故障で整ひません事なら價から篤と意見を申て枠に斷念をさせる樣に致しませう　鶴「夫りやアなるほどお前さんから意見を被成ッても陀目だ僕の意見で諦めの附樣なら苦前さんの耳へ入れねへで諦めさせるだけれども到底陀目だと見極めたから掌添せて遣ンなすつた方が宜らうと存じて入らざる口も利て見たが御不承知じゃア仕方がねへ又其中御目に掛りやせうと暇乞ひさへそこ〳〵に歸宅を爲せしに其夕方新兵衛の諾否を氣遣ひ新三郎と鶴吉が象吉の許を音信ければ二人りを奥の二階へ通し新兵衛が挨拶の不出來なるを告たるに新三郎は蹶じめ斯あるべしと推し居たれば然迄は驚かざれど鶴吉の失望言ばかり無く右左の回答さへあらざりき　新「乾度其樣な分らない事を申すだらうと存て居りました篤と鶴吉とも相談を致しまして何とか又御扱ひを願ひ升かもしれません　鶴「鶴さん何も然力を落すにも及ばねへ假令一端別れ樣とも互ひの心さへ變ずに居りゃア金は世界の涌物だひとつ間拍子が宜けりゃア四百や五百の金は何ンでもねへ事だ　鶴「有難ふござい升新さんモウ御暇を致しませうか　新「然サ御暇を仕ませう親方種〳〵御厄介で有難ふございました　鶴「何だか歸し度ねへ樣な氣がする新兵衛さんの方へも師匠の方へも今夜は僕の家へ泊るから楽じ被成ンなといふ手紙を出して遣るから此二階へ泊ッて往ねへ

第四回

德川十二代の將軍從一位太政大臣家齊公十七の女子を淺姫君と號し御子五十有一人の内頗る御愛子にて在せしが越前福井の城主從四位の少將象行越前守齊承朝臣に嫁し玉ひたり此姫君は孫の外賑やかなる事を好せ玉ひ常に御狂言の催し其他聞へし藝人を召さるゝ事屢〳〵なりき或時鶴吉加賀歳の同胞を召され最初は十郎の髪梳を語りたるに此鶴賀節は宮古路豊後樣の門人富士松薩摩樣より別れて一派を爲したる物なれば語り物の如きは江戸節にある物を其儘語りたるが多し然るを今の江戸節と新内とは似ても似附ず新内節は下品の極に置れ江戸節は上品の極度に居りて殆と里耳に遠き有躰なりき淺姫君は鶴吉の髪梳を聞し召れてこよ無ふ感し恩され今一段をどの御好みにてかたみ送りを語りしに一座水を打たる如く聽者眼に涙をせざるは無し淺姫君も思はず御胴着の袖にて眼尻を拭ひ玉ひ唯見れば鶴吉は眞の涙を飜し折〳〵手拭ひを以て眼を拭へど涙は依然として止めあへざりき纏て淨瑠璃は惜かりしとの聲に終り姉妹は見臺と三味線を離れ目禮をして其座を下りしが淺姫君は中老の村井を召されて鶴吉とやらが技藝に感能なるは聞しにも尚優れり殊に今かたみ送りを語るに臨み自から鬼王團三になり敷行の涙を飜したるは不思議なり其文章に感ずる所ありて思はず涙を飜せるにや後學

の爲め知らま欲しければ聞てみやれとの仰せを長み村井は目錄の外に白縮緬一反を白木の〔十ノ下に戔之と印小性に侍せて藝人溜りに休息を爲し居る鶴吉を御次ぎへ呼出し　村「今日は御苦勞でございました寔に面白い事で上みでも殊の外御滿足で是は輕少ではあるが別段御手許から下さるのであるから頂戴を被成い　鶴「嘸御聞苦しう被爲在ましたらうに別段の頂戴物で恐れ入ります　村「就て異な事の御尋ねをする樣だがかたみ送りの件で和女が正眞に涙を飜し何程手拭で拭ても側から涙の出るのを上みでも御不審に思召し定めし淨瑠理の文章に感じて思はず出る涙とすればあの樣に瀧の如く出る理由なものでは無い藝の秘事とでも言事か存ぜんが後學の爲めに聞度といふ御意じやが苦しからずば御咄し下さいト聞れて鶴吉は何ンと御答へを爲して宜らめと其回答に躊躇せしが包み隱さば惡しからんと四邊を見廻しながら　鶴「積らぬ事が御眼に觸れ御尋ねに預りまして面目次第もございませんが御尋ねゆえに隱さず御咄しを申上げ升長谷川町の新道に伊勢屋新兵衛と申す呉服屋がございまして其一人り息子の新三郎と申す者と不圖した事から行末の約束迄を致した所が思はぬ人に思れて其媒酌人に立人は思ふ男の現在親御二人りの中を始めから知ッて居たらば媒酌に立もせまいコリヤ　寧「打明て咄した方が宜らうと人を以て言込み升と五百兩といふ持參金を持て來る嫁が他にあるゆえ五百兩持つて來るなら貰ふが然るを致しては呉ましたが其日稼ぎの藝人で五百兩といふ大金の工面が附う筈もなく嫌でも一端別れずばなスまいといふ咄しになり其男と泣明した時の事を思ひ出せば唯今でも悲く成ッて止度も無く涙が出てなりません主と困苦を倶にして敵を討うと喜ぶ甲斐無くすご〳〵古郷へ返さるゝ鬼王國三の本意無さを今の吾身に思ひ比べ御上みの御眼に止る迄泣ましたのでござり升と又潸然と泣居りたり村井は鶴吉の便なきを察し暫時貰ひ泣を爲し居りしが　村「左樣でありましたか凡そ夫婦の緣といふものは豫じめ天の定めたもので其天緣さへ盡ずに居れば必らず夫婦に成れぬといふ事はありませんから體を大事に短氣を出さず時節の到來を待より外に仕方はありません異な事を御聞申て吾儕までが泣ましたとやをら其座を起ち淺姫君の御前に出て涙の事を承はりしが箇樣ゝこの回答にさむらうと鶴吉が返答振を聞へ上げしに夫は近頃不便の者なり五百兩とやらは妾が手許より取らすべければ双方の親共へ申聞夫婚と爲して取する樣其方より用人共へ申通し能きに計らひさむらへと意外の御沙汰に村井は他人の事にしあれど嘸鶴吉が喜びつらんと思はず嬉しく泪に暮しが稍有ッて　村「今に始めぬ御仁心嘸鶴吉が喜びませうと吾儕迄が嬉しく涙を飜しました早速鶴吉に申聞けますでござりませう　鶴「マア待や今申聞て喜ばせたうへで用人共が思ひの外不得心であるか又親共へ申聞ても意外に不承知かも知れず其時再度嘆を掛るよりは申さずに置て事の成就を仕た上で咄した方が宜からうでないか　村「御意の通りでございい升左樣なら差扣へ居りませうト御前を下り御住居附きの御用人臼井與左衛門へ村井より箇樣ゝこの御意なり早〳〵御取り扱ひ下され度と述ければ與左衛門は眉に皺を寄せ御物數寄なる御沙汰なり上意とござらば是非も無し去りながら其新兵衛とやらへ當御住居より突然使を遣はし箇樣致せよと申附るも異なものなり又申附たる所で承諾をせねば御威光を以て強てと申す理由にも參らねば僥倖北の町奉行獅原主計頭は別懇なれば内ゝ町奉行へ談じ何とか事成就仕る樣取り計らひ申すべしと諾ひ其翌日臼井は呉服橋内なる獅原主計頭の役宅へ赴き主計頭に面會成し今日推參候は餘の儀にあらず淺姫君樣より異な事の御注文にて殆ど當惑せり依て貴殿を勞し姫君樣の御望みを貫く樣特別の御取扱ひを願ひ度爲めにてあり其事は斯ゝ箇樣ゝと鶴吉新三郎が關係の事を逐一申述たるに主計頭は恐れながら下情に能く通じ玉ひ御優しき遊ばれ方と主計頭感服奉る早〳〵名主へ申附新兵衛とやらへ理解を申聞け必らず姫君の御仁惠の御水泡に歸せざる樣御取扱ひを致すでござらうと快ふ諾ひければ臼井も頼み甲斐ありしを喜び歸

邸のうへ村井迄主計頭が承諾の旨を復命に及びければ村井より淺姫へ言上せしに淺姫も大に滿足せられたり

斯て主計頭は長谷川町の名主村松某を呼び寄せ用人安井善作より其方支配内に奥服渡世伊勢屋新兵衛と云ふ者あるよし其悴新三郎に鶴賀鶴吉と云る藝人を妻にせよと世話爲せる者ありしに五百兩の持參金ある者にあらざれば嫁にはせじと云ひ居るよし道理神田橋御住居にて其事を聞し召れ五百兩の持參金は姫君樣の御手許より下し置るゝ旨なれば元の媒酌人へ渡り鶴吉を嫁り永く夫婦たるべき樣利解申聞られよ斯ても新兵衛が不承知とならば奉行所へ召連られよ御奉行直ちに御利解あるべしとなり早く取計らひさむらへとありければ村松の曰く新兵衛は隨分强情なる男なれど定めし有難がりて御受致すでござらうと奉行所を辭し去り直ちに新兵衛が許へ申談じ度き儀候間早〳〵玄關へ罷出られ候樣云々との召喚狀を發しければ新兵衛は玄關（此當時名主の宅を玄關と稱せり）へ呼るゝ覺へは無けれど往ぬ理由にも行ずと薄氣味惡く村松の玄關へ至りしに此方へとて座敷へ通し茶よ菓子よと款待ければ新兵衛は不審晴ざりしに聽て村松が出來り足下を能く〳〵呼び立たは他の事でも無く今日北の奉行所より呼び出しにて出頭仕たるに用人安井より足下の身に取りては冥加至極の談じありと五百兩の持參金を淺姫君御手許より下し置るゝに付き鶴吉とやらを悴新三郎の嫁に致す樣足下へ利解をせよとの事なり五百兩といふ大金殊には將軍家の御愛子たる神田橋御住居の御手許より下さるゝとあらば取も直さず御住居が媒酌人同樣なり有難き仕合せにはあらざるやよも違背はあるまじとありしに新兵衛は暫時く考へ仰の如く冥加に餘る僥倖なが上藝人を商人の女房には不釣合なり迚もの事の御仁惠に五百金を御住居の御手許

より賜はり御側女中の内を悴の妻女に賜る樣御取り扱ひが願ひ度と傍若無人の返答を村松は呼笑もあり腹立しくもありて足下が一家の都合を御住居が計らせ玉ふ道理は無し御不承知とならば是から奉行所へ同道爲すべければ直ちに御奉行へ不承知の旨を申上げられよと威されて新兵衛は青くなり委細畏まり奉りぬ是には大門通りの馬具師兼吉と申す者が口入なれば其方へ申聞早速迎ひ取り申すべければ五百金の事は間違ざる樣貴郎樣より然るべくと徐念を押て立歸り兼吉を呼寄せて其趣きを咄したるに兼吉は勿躰至極も無き事なり願くば五百兩の金は辭退をされたが良んと勸めたるを中〳〵承引景色も無かりしを種〳〵兼吉に說れ漸やく辭退を爲す事に承引し村松迄其事を申出たるに村松も至極其擧を賛成し奉行所へ申立奉行より御住居附の用人臼井迄申送りければ神妙の事なりとて感じ恩され持參といふ名を除き三百兩婚姻の支度費用の内へ御補助下さる旨にて賜はる事とし新兵衛は特別に御住居及び御表の奥服御用達を仰せ附らるる事となりぬ兼吉より新内加賀歟へ結婚の儀を言ひ入れたるに父も姉も冥加に餘る事なりとて喜び吉辰を選みて結婚の式を擧御禮として鶴吉は御奥へ上り新三郎は御用人詰所迄禮に出頭せしに物珍らしがるは奥女中の常なるに鶴吉が懸煙の來りしを一見せばやとて御錠口も玄關の唐紙の内も椎茸を弄に量りし如くなりしとなん